禁じられた快楽
――ヘミングウェイ作品とマスターベーション言説

高野泰志

イントロダクション

過去20年間におけるアーネスト・ヘミングウェイ（Ernest Hemingway）の研究はセクシャリティの問題を中心に発展してきたといっても過言ではない。ひとつには1986年に『エデンの園』（*The Garden of Eden*）が死後出版されたことが原因としてあげられる。この作品はそれまでのヘミングウェイ作品では見られなかったような、登場人物どうしの性の実験を赤裸に描いたものであり、研究者たちに大きな衝撃を与えたのである。その直後の1987年に出版されたケネス・リン（Kenneth Lynn）の *Hemingway* は、ヘミングウェイが幼少期に姉と同じ女の子の格好をさせられていたという伝記的事実を重要視し、ヘミングウェイのセクシャリティを心理分析した研究書である。このリンの研究は1990年のマーク・スピルカ（Mark Spilka）による *Hemingway's Quarrel with Androgyny* や今村楯夫の『ヘミングウェイと猫と女たち』という研究を導き、作品中にヘミングウェイの両性具有願望をあぶりだす「両性具有」論を登場させることとなった。こういったセクシャリティ研究の隆盛を受けて、1994年にはナンシー・カムリー（Nancy Comley）とロバート・スコールズ（Robert Scholes）による *Hemingway's Genders: Rereading the Hemingway Text* が出版される。これは書簡なども含めた「ヘミングウェイ・テクスト」を時代のコンテクストに照らし合わせてヘミングウェイのセクシャリティを分析した研究である。その後は1999年にカール・Ｐ・エビィ（Carl P. Eby）の *Hemingway's Fetishism: Psychoanalysis and the Mirror of Manhood* が精神分析を用いてヘミングウェイの性的志向を分析し、同年デブラ・Ａ・モデルモグ（Debra A. Moddelmog）の *Reading Desire: In Pursuit of Ernest Hemingway* がヘミングウェイの同性愛志向を追求するなど、多様な研究が生み出されている。特に後者はそれまで主流であった両性具有論の問題点を指摘し、セクシャリティ研究の方向性を根本的に変えた重要な著作である。2005年に上梓されたリチャード・ファンティーナ（Richard Fantina）の *Ernest Hemingway: Machismo and Masochism* はこの新しい研究動向を受け継ぎ、ヘミングウェイ作品に見られる女性に支配されたいという願望を浮き彫りにした意欲的な研究である。

本稿では、こういったヘミングウェイのセクシャリティ研究の一環として、特にマスターベーションの表象を取り上げる。これまでのセクシャリティ研究では、ヘミングウェイのマスターベーション描写に関する研究はなかった。しかし公の場でマスターベーションに言及することがタブー視されていた時代であったにもかかわらず、ヘミングウェイは作品中で意外にも頻繁にマスターベーションに言及しているのである。生殖のためという言い訳を持たない、純粋に性欲を満足させるためだけの行為をどのように捉えていたのかを見ることは、ヘミングウェイの性意識を知る上で非常に重要なのである。

1. マスターベーションの歴史

本論に入る前に、まずはマスターベーションに対する社会的な認識がどのように変化していったのかを簡単に概観したい。19世紀半ば以降、アメリカではマスターベーションに関する言説が爆発的に増大した。突如マスターベーションが様々な出版物に登場することになった最も大きな原因は、当時の医学的言説の影響にあった。1712年に作者不詳の『オナニア』（*Onania*）という本が登場して以来、マスターベーションは単に宗教的な罪深い行いというだけにとどまらず、身体を消耗させ、狂気や盲目を引き起こす「病」として捉えられるようになった[1]。19世紀にはこの医学的視点がさらに発展し、医者たちはマスターベーションそのもの以外に新しい病を作り出した。マスターベーションは、本来保存されるべき精液を浪費する行為であって、あまりにも頻繁にマスターベーションにふけると勝手に精液が体外へと漏れ出す精液漏という病にかかると考えられたのである。この本来は生殖のために使われるべき精液を、浪費から守って保存すべきだとする考え方は、合理主義的な新大陸アメリカにおいてもっとも広く受け入れられた。「アメリカでは資本主義信仰が宗教と同じくらいの重要性を持っており、投資が建設的であればそれに報いたが、何も生み出さなければそれを罰したのである。そしてそれはメタファーとしてセックスの領域にまで拡大解釈されることになった。

当時は射精のことを「消費」（spent）と呼ぶのはごく一般的なことだった。マスターベーションは何らの利益を生み出すこともなかったために、浪費であると断罪されたのだ」（Friedman 91）。

このような風潮の中、マスターベーション禁止の言説は無数に登場し、またそれに反対する言説も少数ながら存在していた。文学作品の中にも数多くの例が見られるが、ハーマン・メルヴィル（Herman Melville）の『モービー・ディック』（*Moby Dick*）の94章「手搾り」には船乗りたちが精液／鯨油を放出することの恍惚が描かれ、ウォルト・ホイットマン（Walt Whitman）の『草の葉』（*Leaves of Grass*）には精液について触れた詩が収録されている[2]。またマーク・トウェイン（Mark Twain）は1879年の段階で「オナニズムの科学に関する若干の考察」（"Some Thoughts on the Science of Onanism”）と題された講演を行い、マスターベーション禁止の言説を嘲笑っている。

しかしマスターベーション擁護の意見が本格化するのは20世紀に入ってからである。その先駆けとなったのがハヴロック・エリス（Havelock Ellis）の『性の心理学』（*Studies in the Psychology of Sex*）であった。全7巻にいたるこの本は、1897年から1928年まで断続的に書き継がれた。その中の一つに「自体愛」（“Auto-Erotism”）と題された論文が収録されている。ここでエリスは、先に言及した『オナニア』とそれに続くマスターベーション批判の書を歴史的に概観して見せた後、次のように述べる。

> 多くの医学的権威の間違った考え方が伝統的に受け継がれ、現在にまで至っている。その結果、強力な武器があくどい偽医者たちの手に握られることになったのだ。何千人もの、無知で、たいていは無実の若者たちが、黙って苦痛と恐怖と後悔を感じていなければならなかったのは、おおむねすべて、善意からであれこの問題に関して見当違いのことを書いていた［中略］著者たちのせいなのだ。（249）

「お上品な伝統」のもとに性的な問題の隠蔽されていた時代、それをあからさまに扱ったことで、エリスの一連の著作は大きなセンセーションを巻き起こす結果になる。この後、時代は1920年代の性の解放へと向かうことになるが、前世紀の精液科学の影響がまったく払拭されることはなく、根強く信じられ続けたのである。マスターベーションはその後も教会や医者たちにひどく恐れられる「病」であることをやめなかった。彼らは少年たちの健康を害するこの悪徳をやめさせるために、マスターベーションの及ぼす悪影響を繰り返し主張し、少年たちの恐怖に訴えかけた。こういったマスターベーション罪悪視は、今日においてさえ、いまだ根強く残っている。19世紀末に生まれ、1920年代に作家活動を開始したヘミングウェイは、マスターベーション言説を通じて当時大きく変容しつつあった性意識を吸収することになったのである。

2. 初期作品にみられるヘミングウェイのマスターベーション観

以下でヘミングウェイの作品中に現れたマスターベーションの描写を時代順に見ていくことで、ヘミングウェイの性意識がどのように変化していったのかを考察する。ヘミングウェイは、ピューリタリズム的価値観を植え付けられて育ちながら、後に性の解放の影響を大きく受けた人物で、価値観の変動を経験したという点でマスターベーションの描写を検討するには格好の題材である。なぜなら過渡期の時代に生まれ育ったヘミングウェイは、生涯ピューリタニズムの「精液科学」から逃れることに取り憑かれるからである

ヘミングウェイはシカゴ郊外のオークパークという保守的な町に生まれ、非常に厳格なピューリタンの家庭で育てられた。子どものころ、ヘミングウェイは医者をしていた父親クラレンス（Clarence Edmonds Hemingway）に、19世紀的な価値観を植え付けられる。フィクションの中でではあるが、ヘミングウェイの半自伝的作品「父と子」（“Fathers and Sons”）では、主人公ニックの父親の性に関する意見が以下のようにまとめられている。

> His [Nick’s] father had summed up the whole matter by stating that masturbation produced blindness, insanity, and death, while a man who went with prostitutes would contract hideous venereal diseases and that the thing to do was to keep your hands off of people. (*CSS* 371)

マスターベーションをすると目がつぶれ、気が狂い、死に至るというのは、当時の典型的なマスターベーション言説である。実際にヘミングウェイの父親クラレンスがこのような内容を息子に話したかどうかは定かではない。実

際、クラレンスは学生を対象に性教育に関する講演を行っていたという記録も残っているので[3]、もっと詳しく性に関する教育を与えていた可能性もある。しかしスピルカの研究に見られるように[4]、19世紀的道徳観を厳格に持ち続けたクラレンスが、たとえどれほど進歩的な性教育を行おうとしたとしても、おそらくはそれまでのピューリタニズムの伝統をそれほど大きく逸脱するものではなかったはずである。両親の書いた手紙の内容や、ヘミングウェイの姉の書いた伝記などを見る限り、むしろきわめて保守的なものであっただろうことは明らかである。

しかしヘミングウェイ自身は19歳の時に第一次世界大戦に参加するため、ヨーロッパに行き、そこで初めてそれまでとは違った性に関する考え方を目撃することになる。また帰国後、ヘミングウェイは先ほど紹介したハヴロック・エリスの著作に出会う。ヘミングウェイは20歳前後でこのエリスの著作に出会ったとき、非常に大きな衝撃を受け、強い関心を抱いた。それは結婚の直前、婚約者のハドリー・リチャードソン（Hadley Richardson）にも読むように勧め、ふたりでこの本に関して議論していたことからも明らかである。

ヘミングウェイ最初期の短編「エリオット夫妻」（“Mr. and Mrs. Elliot”）には主人公ヒューバート・エリオット（Hubert Elliot）がおそらくはマスターベーションをしたらしい場面が描かれている。

> They spent the night of the day they were married in a Boston hotel. They were both disappointed but finally Cornelia went to sleep. Hubert could not sleep and several times went out and walked up and down the corridor of the hotel in his new Jaeger bathrobe that he had bought for his wedding trip. As he walked he saw all the pairs of shoes, small shoes and big shoes, outside the doors of the hotel rooms. This set his heart to pounding and he hurried back to his own room but Cornelia was asleep. He did not like to waken her and soon everything was quite all right and he slept peacefully. (*CSS* 124)

新婚初夜にセックスがうまくいかず、妻は先に寝てしまう。ヒューバートは廊下に並ぶ他の部屋の靴を見て突然欲情し、部屋に戻るが、寝ている妻を起こしたくないと感じる。カムリーとスコールズは、その直後の”soon everything was quite all right and he slept peacefully”という文章が、ヒューバートのマスターベーションを描いているのだと主張している（85-86）。つまりこの”soon”の間になんらかの性的満足を感じたはずだというのである。

カムリーらが指摘するように、ヒューバートは典型的なピューリタンとして描かれている。ヒューバートは結婚するまで”pure”で”clean”な生活を送ってきたと主張し、それまで性行為を行ったことはいちどもなかった。妻とは「子供を産むために」セックスをするのである。セックスを純粋に生殖のためだけのものと捉える考え方はピューリタニズムのセックス観の特徴である。するとこの場面でヒューバートの行うマスターベーションは、自らの主張するピューリタニズム的価値観とはまったく相容れない行動であると言えるだろう。生殖のために保存するべき精液を、マスターベーションという生殖には関係のない行為によって、無駄に浪費しているのである。

ヘミングウェイはピューリタンがマスターベーションを行うという皮肉な状況を、他の作品でも描こうとしていた。未発表の作品の断片で「ノー・マンズ・ライブラリー」（“No Mans Library”）と題されたものには以下の一節が見られる。

> NO MANS LIBRARY ---- BOOKS NOT PUBLISHED BY
> THE THREE MOUNTAINS PRESS.
>
> (1) FEMALE VIRGINS AND MALE MASTURBATORS .
> A study of intimate customs in the Puritan Commonwealth
> (K613)[5]

ここではピューリタンのひそかな特徴として、女性が処女であること、男性がマスターベーションをすることを挙げている。ここでヘミングウェイが示唆しているのは、本来は女性に向けられるべきはずの性欲を、ピューリタンの男たちは自分に対して向けているという状況である。つまりセックスが生殖のためのものであるというピューリタンの規範に自ら背いているという逆

説をあげつらおうとしているのである[6]。

しかしいかにヘミングウェイがピューリタニズムを批判しようとしていたところで、ヒューバート・エリオットや「ノー・マンズ・ライブラリー」のピューリタンの男たちは、生殖のためのセックスという規範から逸脱した人物として描かれているのであり、結局は彼らを批判する根拠そのものがピューリタニズムの規範でしかない。執拗にピューリタン自身が規範から逸脱していることを批判している様子からは、むしろその規範から逃れたいというヘミングウェイ自身の願望が透けて見えてくる。ヘミングウェイもまたこの規範の内部で育ってきたのであり、この規範から逃れるために規範そのものの無効性を訴えようとしているのである。これはセックスが生殖のためのものであり、マスターベーションを行うことで精液を無駄に浪費するのは罪悪である、というピューリタニズムの規範が、ヘミングウェイの身体に深く刻み込まれている証拠であると言えるだろう。

3. カトリシズムへの逃走

ヘミングウェイはこの、いまだ根強く残るピューリタニズムの価値観に生涯取りつかれた作家であり、なんとかその影響力から脱しようと努力をし続けた。それが20年代から30年代にかけてはカトリシズムへの傾倒と医学言説の取り込みというふたつの形になって表れるのである。まずはカトリシズムの問題を『日はまた昇る』（*The Sun Also Rises*）の主人公ジェイク・バーンズ（Jake Barnes）の人物造形を通じて論じていきたい。

ジェイクは戦争での負傷が原因で性的能力を失っている。ヘミングウェイがある程度自分の姿を投影した登場人物に、あえて性的能力を失わせたのは、性欲を抑圧しなければならないというピューリタニズム的強迫観念の影響があったのかもしれない。それはジェイクが性欲を十分に満たす手段を持たないにもかかわらず、性欲そのものを失っているわけではないという事実からも妥当であるように思える。ジェイクは望むと望まざるとに関わらず、自らの感じる性欲を抑圧せざるを得ないのである。

しかし綿密にテクストを読むと、ジェイクは女性との性行為はできないものの、何らかの形で性欲を満たしているらしい描写がいくつか見られる。以下の引用はブレット・アシュリー（Brett Ashley）がミピポポラス伯爵（Count Mippipopolous）をつれてジェイクの部屋を訪れたときの描写である。別室で着替えをするジェイクは突然疲労感を覚え、ベッドから立ち上がれなくなる。

> “What’s the matter, darling?　Do you feel rocky?”
> She kissed me coolly on the forehead.
> “Oh, Brett, I love you so much.”
> “Darling,” she said.　*Then*: “Do you want me to send him away?”
> “No.　He’s nice.”
> “I’ll send him away.”
> “No, don’t.”
> “Yes, I’ll send him away.”
> “You can’t just like that.”
> “Can’t I, though?　You stay here.　He’s mad about me, I tell you.”
> She was gone out of the room.　I lay face down on the bed.　I was having a bad time.　I heard them talking but I did not listen.　Brett came in and sat on the bed.
> “Poor old darling.”　She stroked my head.
> “What did you say to him?”　I was lying with my face away from her.　I did not want to see her.
> “Sent him for champagne.　He loves to go for champagne.”
> *Then later*: “Do you feel better, darling?　Is the head any better?”
> “It’s better.”
> “Lie quiet.　He’s gone to the other side of town.” (*SAR* 61-62, emphases are mine)

ケネス・リンが指摘したように（324）、この引用文中のイタリックになった”then”と”then later”というフレーズには、先ほどの「エリオット夫妻」の”soon”と同様、何らかの性的な行為が行われたことが示唆されている。ここでブレットの行った行為については、ただのキスだったという意見から、オーラルセックス、肛門性交に至るまで、さまざまな説が出されてきた[7]。

しかしいかなる行為が行われているにせよ、性行為自体を行うことができず、その代替行為として性的満足を得ているのであれば、ここで描かれているのはブレットの手を借りたマスターベーションであると言えるのではないだろうか[8]。

そのように考えると以下の場面は非常に重要な意味を帯びてくる。これは物語の前半でジェイクとブレットがパリの街中を馬車で移動する場面の直後である。ブレットと別れてひとりアパートに戻ってきたジェイクはブレットのことがどうしても頭から離れず、なかなか眠りにつくことができないでいる。

> I lay awake thinking and my mind jumping around. Then I couldn't keep away from it, and I started to think about Brett and all the rest of it went away. I was thinking about Brett and my mind stopped jumping around and started to go in sort of smooth waves. Then all of a sudden I started to cry. Then after a while it was better and I lay in bed and listened to the heavy trams go by and way down the street, and then I went to sleep. (*SAR* 39)

ここでジェイクはブレットのことを考えているうちに、なめらかな波のようなものを感じ始める。その後ジェイクは突然泣き出すが、その直後にまたしても"Then after a while"という時間経過を表す表現が使われ、その後でジェイクは気分がよくなったと書かれている。先ほどときわめて類似した描写であることからも、ここで描かれているのはおそらくは性的なオーガズムであると考えられる。つまりジェイクはブレットを思いながらここでマスターベーションをしているのである。

こうして、正常なセックスをすることができず、なおかつ性欲を失っていないジェイクは、マスターベーションを繰り返さずにはいられない。そしてマスターベーションを繰り返すことで、ジェイクはピューリタニズムのタブーを犯し続けなければならないのである。いわばジェイクはピューリタニズムの想定する神の国からはあらかじめ排除されている人物なのである。

ジェイクがカトリック信者であるのはこのことが関係している可能性がある。「厳密に言えば」（*SAR* 129）カトリック教徒であると自認するジェイクは、積極的にカトリックの教義に心酔しているというよりはむしろ、ピューリタンの信仰から排除されてしまっているためにカトリック教徒にしかなれないのである。ヘミングウェイ本人もまた『日はまた昇る』の刊行直後、2度目の結婚の際にカトリックに改宗している。これは妻がカトリック教徒であったための便宜上の改宗でもあったのだろうが、ひとつには自らの身体に深く刻み込まれたピューリタニズムの価値観から逃れたかったからかもしれない。自分の中からピューリタニズムの価値観を完全に消し去りたいという願望が、ジェイクのカトリシズムに反映されているのである。

4. 医学への接近

1930年代になると、ヘミングウェイはピューリタニズムへの敵意を表現するのに、医学言説を援用するようになる。33年にヘミングウェイは「神よ殿方を憩わしめたまえ」（"God Rest You Merry, Gentlemen"）という短編を書くが、この作品はマスターベーションに対する罪悪感を主要なテーマとしている。非常に敬虔なキリスト教信者であるこの少年は、自分のペニスが勃起することを「あの恐ろしい肉欲」（*CSS* 299）と呼び、病院で医者に去勢してほしいと頼む。医者に去勢を断られた少年は、クリスマスの日にカミソリで自分のペニスを切断してしまうのである。

この作品はそもそもヘミングウェイの友人である医者、ローガン・クレンドニング（Logan Clendening）あてに送られた相談の手紙にもとづいて書かれた。ヘミングウェイは当時、このクレンドニングの影響を強く受けていた[9]。ベストセラーになったクレンドニングの著書、『人間の身体』（*The Human Body*）では、患者を犠牲にする誤った信仰心に対して激しい怒りがぶつけられている。ヘミングウェイもまた、この作品を書くことで、マスターベーションを罪悪視するピューリタニズムの宗教教義を批判しようとしていたと考えられる。

> "It is wrong," said the boy. "It's a sin against purity. It's a sin against our Lord and Saviour."
>
> "No," said Doc Fischer. "It's a natural thing. It's the way you are supposed to be and later on you will think you are very

fortunate."

...

"I can't stop it happening," the boy said. "I pray all night and I pray in the daytime. It is a sin, a constant sin against purity."

"Oh, go and ---" Doctor Wilcox said. (*CSS* 300)[10]

たびたび少年の口にする"sin"という言葉は、少年を縛り付けるピューリタニズムの規範の強力さをうかがわせる。おそらくはクレンドニングとともにヘミングウェイもまた、少年を自らペニスを切り落とさせるまで追い込む宗教の残酷さに怒りを覚えているのである。

しかし見逃してはならないのが、結局医者たちが少年に与える「医学的説明」もまた、結局は少年を説得することができないという点である。医者たちは少年の身体に起こる状態が「自然」であって、何ら「罪」ではないことを納得させようとするが、強い宗教観にとらわれた少年は医者たちのこの説明に耳を貸そうとはしない。その結果、少年はカミソリでペニスを切り落とすという行為に及ぶのである。不合理な宗教教義の犠牲になった少年を結局は誰も助けることができない。ヘミングウェイもまた少年と同じようにピューリタニズムの価値観の中で育ったことを考えれば、このことは非常に重要な意味を持っていると考えられるだろう。ちょうどジェイク・バーンズが完全にはカトリック教徒になりきれていなかったように、医学という準拠枠もまた、ヘミングウェイにとっては十分に機能していないのである。

5. 性欲の持つ意味

最後に1940年の『誰がために鐘は鳴る』(*For Whom the Bell Tolls*)を見てみたい。この作品における主人公ロバート・ジョーダン(Robert Jordan)とマリア(Maria)のラブストーリーはあまりにロマンティックすぎるという批判を受けてきた。特にジョーダンの要求に完璧に応じようとするマリアの人物像はあまりにも浅薄で「信じられないくらい従属的で献身的」(Young 109)だと攻撃されてきた。しかしジョーダンの目を通して語られるふたりの恋愛を額面通りに受け取ることはできない。ふたりが初めて出会った直後の食事の場面を見てみたい。

Her [Maria's] legs slanted long and clean from the open cuffs of the trousers as she sat with her hands across her knees and he could see the shape of her small, up-tilted breasts under the gray shirt. Every time Robert Jordan looked at her he could feel a thickness in his throat.

…

They were all eating out of the platter, not speaking, as is the Spanish custom. It was rabbit cooked with onions and green peppers and there were chick peas in the red wine sauce. It was well cooked, the rabbit meat flaked off the bones, and the sauce was delicious. (*FWBT* 22-23)

後に初めてふたりがセックスをするときからジョーダンはマリアのことを「ウサギ」というあだ名で呼び始めることを考えると上の引用は非常に重要な意味を持つ[11]。ジョーダンが何より注意をひかれているのはマリアのむき出しになった脚であり、その肉体を横目にしながらウサギの肉を味わっているのである。このときマリアはジョーダンの中で欲望の対象と化しており、ジョーダンがこの日の夜にマリアの肉を味わうことになることを予示しているのである。

ジョーダンがマリアを肉欲の対象と捉えていることはこれ以後も作品中に何度も繰り返しほのめかされている[12]。そしてさらに重要な点は、表向きマリアの保護者として振舞いながらも、ファシストにレイプされて頭を丸刈りにされたマリアの傷に対してジョーダンがきわめて鈍感であることである。マリアと歩きながら思考をめぐらす中で、ジョーダンは急にマリアと結婚してもかまわないと思いつく。

Spanish girls make wonderful wives. I've never had one so I know. And when I get my job back at the university she can be an instructor's wife and when undergraduates who take Spanish IV come in to smoke pipes in the evening and have those so valuable informal discussions about Quevedo, Lope de Vega, Galdós and the other always admirable dead, Maria can tell them about how some

of the blue-shirted crusaders for the true faith sat on her head while others twisted her arms and pulled her skirts up and stuffed them in her mouth. (*FWBT* 164-65)

ゲリラの一団に救出された後、マリアは長い間口をきくことができなかったという。これは自分の受けた体験を語ることがどれほど大きな精神的衝撃になるかを物語っている。ジョーダンはそのマリアの受けたレイプの場面を空想の中で常套的なレイプ場面として再構成し、それを当然のことのように自分の学生に語らせようと考えているのである。

マリアが「信じられないくらい従属的で献身的」であったのは、それがマリアにとって唯一の生き残るための手段であったからに他ならない。ゲリラに救出された後はレズビアンのピラール（Pilar）の欲望の対象として、ピラールからジョーダンに譲り渡された後はジョーダンの欲望の対象として、マリアは他者の欲望にそのまま迎合することで生き残ってきた。いわばマリアは他者の欲望を映し出す鏡なのであり、その意味でエドマンド・ウィルソン（Edmund Wilson）がマリアを「若者のエロティックな夢想の完璧な表現」（242）と批判したのは、ウィルソンの意図とは別の意味でマリアの本質を言い当てている。

しかし作品後半にはマリアがジョーダンの欲望の対象であることを拒む場面が描かれる。橋を爆破する前夜、ジョーダンはマリアと一夜を過ごすが、マリアが痛みを感じたためにセックスをすることができない。以下はその直後の場面である。

> “Oh, Roberto, I am sorry I have failed thee. Is there not some other thing that I can do for thee?”
>
> He stroked her head and kissed her and then lay close and relaxed beside her, listening to the quiet of the night.
>
> “Thou canst talk with me of Madrid,” he said and thought: I’ll keep any oversupply of that for tomorrow. I’ll need all of that there is tomorrow. There are no pine needles that need that now as I will need it tomorrow. Who was it cast his seed upon the ground in the Bible? Onan. How did Onan turn out? He thought. I don’t remember ever hearing any more about Onan. He smiled in the dark. (*FWBT* 342)

ここでジョーダンは、射精の手助けをしようというマリアの提案を断ってオナニズムの語源になった聖書の中の人物、オナンに思いをめぐらせている。まずここで気づかなければならないのは、ジョーダンが力の源である精液を保存すべきものと捉えている点である。最初に述べたように、この考え方こそが19世紀のアメリカに特徴的なマスターベーション観なのである。そういう意味でジョーダンは典型的なピューリタニズムの価値観を持つ人物であると言えるだろう。またジョーダンが覚えていないと言っているオナンのその後であるが、オナンは精液を大地に蒔いた後、神の怒りを受けて打ち殺されるのである。あえて「覚えていない」と発言させることでオナンの末路に注意を喚起していると考えれば、ここでマスターベーションと「罪」とが強く結びつけられていることは明らかである。

この作品以前まであれほどピューリタニズムの価値観を攻撃することに腐心していたヘミングウェイが突如、主人公にその同じ価値観を代弁させているのは一見奇妙に思える。しかしこのジョーダンという人物は、作者ヘミングウェイを投影した人物ではなく、むしろ批判的に相対化された人物とみるべきではないだろうか。これまでジョーダンをヘミングウェイと同一視する解釈が頻繁になされてきたが、これまでも述べたようにジョーダンはそれほど同情的には描かれていない。ジョーダンは一見マリアを守るヒロイックな人物であるが、レイプをめぐるヘミングウェイの描写を綿密に見る限り、そのような見方には再考の余地があるはずである。スーザン・グリフィンはレイプを研究した著書で「騎士道の基本は、男が女を、男の手から守ることにある。（中略）早い話、騎士道とはレイプの存在を前提に成り立つ、昔ながらのゆすり行為にほかならないのだ」（32）と述べているが、そういう意味で女性を「家庭の天使」として、男に守られるべき存在と扱っていたピューリタニズムの価値観は、レイプという暴力の上に成り立っていた。そしてジョーダンのマリアに対する態度は暴力的世界からか弱い女性を暴力的に守るという点で、ピューリタニズム的家父長制の典型であり、マリアを守るジョーダンの「男らしさ」はレイプを含んだ暴力が存在することを前提としているの

である。

またヘミングウェイはジョーダンがマリアを性的対象としてモノ化していることを意図的に描き出してもいる。マリアはファシストにレイプされた女性であり、上の場面で痛みを感じてセックスができないのは、そのファシストの暴行が原因であるとマリアはジョーダンに説明している。にもかかわらず、ジョーダンはマリアの身体を気遣いながらもセックスできないことを「最後の夜だというのについていない」(*FWBT* 341)と考える（ちなみにマリアの痛々しいレイプ・ナラティブはこのセックス失敗の直後に置かれている。ここからもヘミングウェイがジョーダンの性欲とレイプとを関連づけようとしているのは明らかである）。またパブロ（Pablo）が爆薬の起爆装置を持って逃亡したことを発見した後、その激しい怒りを徐々に鎮めながら「愛してもいない女と性行為を行った後のような」気分になり、眠っているマリアに向かって「ちょっと前にきみが何か話していればきっと殴りつけていただろう」(*FWBT* 370)と話しかける。そのしばらく後で、結局目覚めたマリアとジョーダンはセックスをすることになる。

> "Oh, Maria, I love thee and I thank thee for this."
>
> Maria said, "Do not speak.　It is better if we do not speak."
>
> "I must tell thee for it is a great thing."
>
> "Nay."
>
> "Rabbit ---"
>
> But she held him tight and turned her head away and he asked softly, "Is it pain, rabbit?"
>
> "Nay," she said.　"It is that I am thankful too to have been another time in *la gloria*."　(*FWBT* 379)

セックスをしたばかりで興奮しているジョーダンとは対照的に、マリアは話すことを拒み、ジョーダンから顔をそむけている。おそらくは痛みを感じているマリアとジョーダンがセックスをしていることから明らかになるのは、ヘミングウェイがジョーダンをファシストのレイピストたちと同一視させようとしていることである。結局のところ、ジョーダンの行った行為は、行為としてはファシストのレイプと同じものであり、男性の性欲の持つ暴力性をむき出しにしているのである。ジョーダンという登場人物において、暴力とエロスは完全に結合している。『誰がために鐘は鳴る』において、すでにマスターベーションは単なるピューリタニズム批判にとどまっていない。精液を保存しながら、橋を破壊し敵を殺すという暴力的任務に出かけるジョーダンは、ピューリタニズムを体現するのみならず、男性の性欲そのものの暴力性をむき出しにしているのである。

結論

これまで「エリオット夫妻」、『日はまた昇る』、「神よ殿方を憩わしめたまえ」、『誰がために鐘は鳴る』と、時代順にヘミングウェイのマスターベーションの描写を分析してきた。最初期のヘミングウェイ作品ではマスターベーションを禁じながらもマスターベーションを行わざるを得ない自家撞着に陥ったピューリタンを描いていた。次にヘミングウェイはカトリックや医学的価値観という別の準拠枠に救いを求め始めた。そして最後には典型的なピューリタンの価値観を保持する主人公を描きながらも、その人物を相対化してピューリタニズム的家父長制の暴力性を描き出した。この最後の段階において、ヘミングウェイはもはや自らを縛るピューリタニズムの軛から脱却できていると言えるのではないだろうか。なぜなら初期作品のように規範を守ることに失敗したピューリタンをやり玉に挙げるわけでもなく、他の準拠枠に頼るわけでもなく、ただその価値観の持つ潜在的暴力性を冷静に見つめているからである。そしておそらくはこのときピューリタニズム的思考の枠組みから脱却できたが為に、生前に完成することはできなかったものの、これ以降で『エデンの園』を断続的に書き続け、あれほど豊かな性の世界を描くことができたのだろう。

註

＊本稿は 2005 年 10 月に開催された日本アメリカ文学会第 44 回全国大会（於北海学園大学）で行った口頭発表に加筆修正を施したものである。

[1] マスターベーションの歴史的事情に関しては Laqueur を参照。

[2] Friedman 97-98 を参照。

[3] Reynolds 119 を参照。
[4] Spilka 17-42 を参照。
[5] ジョン・F・ケネディ・ライブラリーのヘミングウェイ・コレクションにおけるカタログ番号を指す。
[6] ヘミングウェイは半自伝的短編「医者とその妻」（“The Doctor and the Doctor’s Wife”）という作品で、父親クラレンスをモデルにしたヘンリー・アダムズ医師（Dr. Henry Adams）がインディアンにやり込められ、自分の妻にもそのフラストレーションを理解されないでいる状態を描いている。このとき、ヘンリーはひとりベッドの上で銃を空撃ちして弾を排出させる。もちろんこの行為は銃というペニスの象徴を空撃ちさせていることからマスターベーションを連想させる行為である。ピューリタニズムの価値観をヘミングウェイに教え込んだ父親の姿をこのように描いているという点で、「エリオット夫妻」や「ノー・マンズ・ライブラリー」に通じる作品であると言えるだろう。
[7] ファンティーナが議論の流れを簡潔にまとめている（101-03）。ファンティーナはここで行われた行為をブレットによる肛門性交と結論づけているが、その最大の根拠はジェイクにペニスがないことである。
[8] ジェイクの傷に関しては、Rudat を参照。ほとんどの論者がジェイクにペニスがないと論じているが、その根拠は作品が書かれた 30 年後のヘミングウェイの言葉を根拠としており、テクスト上からはジェイクの身体的状況は明らかにできない。ここでは詳しく論じる余裕はないが、ヘミングウェイは単に当時（50 年代）流行していた精神分析批評を牽制するつもりでジェイクの性的不能は肉体的損傷に起因することを強調したかったためにこのような発言をしただけであり、実際に医学的にはありえないことである。飛行機の墜落が原因で性的不能になったことがテクスト上に示唆されているが、もっとも医学的にありうる説明は脊髄の損傷による性器部位の感覚麻痺である。
[9] Smith を参照。
[10] ちなみに引用最後のウィルコックスのセリフで、ダッシュで消去されている部分は“jack off”（マスターベーションをする）であった。
[11] アレン・ジョゼフス（Allen Josephs）は「ウサギ」という言葉がスペイン語では女性性器を意味する極めて卑猥な言葉であることを指摘し、レイプされた女性に対するあだ名としては不適切であることから、ヘミングウェイのスペイン語の知識が乏しかったことを指摘している（211-15）。しかし後に触れるようにジョーダンのマリアに対する気遣いのなさを考えると、この言葉が故意に使用された可能性もある。
[12] たとえばマリアを娼婦と比較している箇所など（*FWBT* 166）。

参考文献

Comley, Nancy R. and Robert Scholes. *Hemingway’s Genders: Rereading the Hemingway Text*. New Haven: Yale UP, 1994.

Eby, Carl P. *Hemingway’s Fetishism: Psychoanalysis and the Mirror of Manhood*. Albany: State U of New York P, 1999.

Ellis, Havellock. “Auto-Erotism: A Study of the Spontaneous Manifestations of the Sexual Impulse.” *Studies in the Psychology of Sex*. Vol. 1. Part 1. NY: Random, 1942. 161-283.

Fantina, Richard. *Ernest Hemingway: Machismo and Masochism*. NY: Palgrave, 2005.

Friedman, David M. *A Mind of Its Own: A Cultural History of the Penis*. NY: Penguin, 2003.

スーザン・グリフィン『性の神話を超えて――脱レイプ社会の論理』幾島幸子訳（講談社、1995 年）。

Hemingway, Ernest. *The Sun Also Rises*. 1926. NY: Scribner’s, 1954.

———. *For Whom the Bell Tolls*. 1940. NY: Scribner’s, 1995.

———. *Complete Short Stories of Ernest Hemingway: The Finca Vigía Edition*. NY: Scribner’s, 1998.

Josephs, F. Allen. “Hemingway’s Poor Spanish: Chauvinism and Loss of Credibility in *For Whom the Bell Tolls*.” *Hemingway: A Revaluation*. Ed.

Donald R. Noble. Troy: Whitston, 1983.

Laqueur, Thomas W. *Solitary Sex: A Cultural History of Masturbation*. NY: Zone, 2004.

Lynn, Kenneth S. *Hemingway*. Cambridge: Harvard UP, 1987.

Moddelmog, Debra A. *Reading Desire: In Pursuit of Ernest Hemingway*. Ithaca: Cornell UP, 1999.

Reynolds, Michael. *The Young Hemingway*. NY: Norton, 1998.

Rudat, Wolfgang E. H. *A Rotten Way to Be Wounded: The Tragicomedy of* The Sun Also Rises. NY: Peter Lang, 1990.

Smith, Paul. "The Doctor and the Doctor's Friend: Logan Clendening and Ernest Hemingway." *Hemingway Review* 8.1 (Fall 1988): 37-39.

Spilka, Mark. *Hemingway's Quarrel with Androgyny*. Lincoln: U of Nebraska P, 1990.

今村楯夫『ヘミングウェイと猫と女たち』（新潮社、1990 年）。

Wilson, Edmund. "Return of Ernest Hemingway." *Ernest Hemingway: The Critical Reception*. Ed. Robert O. Stephens. NY: Franklin, 1977.

Young, Philip. *Ernest Hemingway: A Reconsideration*. University Park: Pennsylvania State UP, 1966.